元ソ連スパイが見た原爆

投下直後 米より先に広島・長崎へ

モスクワで今年、101歳の男性が生涯を閉じた。原爆が投下された直後の広島、長崎へ、米国よりも先に調査に入った当時のソ連軍のスパイだった。報告書の所在は今も分からないが、元スパイは晩年、その内容を明かしていた。

「SFのよう」言葉失った

スパイはミハイル・イワノフ氏。第2次世界大戦末期は東京のソ連大使館に在籍していた。

「彼が日本人を悪く言うのを聞いたことがない」。日ロ関係史を研究するアレクセイ・キリチェンコさん(78)は、自宅があるロシアのモスクワでこう振り返った。かつて旧ソ連国家保安委員会(KGB)第2総局(防諜局日本担当)に勤め、「知られざる日露の二百年」(現代思潮新社)の著者でもある。

生前のイワノフ氏はキリチェンコさんに対し、国家の命令で調査した原爆投下直後の広島、長崎での体験を語っていた。キリチェンコさんはその証言の記録をまとめていた。

■ ■

米軍は1945年8月6日と9日、広島、長崎に原爆を投下した。8日に日本に宣戦布告したソ連は原爆を開発しておらず、威力の解明を急ぐ必要があった。

イワノフ氏と同僚のゲルマン・セルゲーエフ氏は上層部から指示され、終戦翌日の8月16日に広島へ、翌17日に長崎へ入った。米国が広島で予備調査を始める20日以上も前だった。

2人は列車で広島駅にたどり着いた。想像した被害をはるかに超える「SF世界のような光景」に言葉を失った。「恐ろしい病気がはやっている」。日本の公安職員から「視察」を控えるよう説得された。

爆心地を突き止め、爆発でできたくぼみの深さを確認する――。爆弾の威力を算定するデータとなる状況をつかむことが最大の任務だった。だが、爆心地で見たのは約1キロ四方の真っ平らな空間。巨大なローラーで突き固めたようだった。

異様な色に溶けた石を拾っていた時、吐き気をもよおすような臭いがした。残留放射線の影響や怖さを知らないイワノフ氏らはそれらを包み、かばんに入れていった。

長崎では、米国の偵察機が原爆投下前に空からまいたという警告の紙片を見つけた。生き残った人はがれきを使い、一時しのぎのあばら屋を建てていた。死体から出る臭い、うめき声、叫び声……。役所の建物の床で一夜を過ごしたが、一睡もできなかった。

■ ■

イワノフ氏とセルゲーエフ氏は、原爆投下直後の被爆地で残留放射線を浴びていた。日本で戦後にできた被爆者援護法に照らせば、「入市被爆者」にあたる。調査後、セルゲーエフ氏は体調を崩して死亡。だが、イワノフ氏は生き延びた。

2007年11月。95歳になったイワノフ氏はキリチェンコさんに「調査報告書や回収品、写真は全て最高指導部に上げた」と語ったという。だが、報告書の所在は今も分かっていない。

右ミハイル・イワノフ氏=2007年、キリチェンコさん提供
左長崎の爆心地から約1キロ地点=ソ連が1946年9月、長崎に派遣した調査団の報告書から

ウイスキー 生死分ける?

科学的な定説ではないけれど…

イワノフ氏とセルゲーエフ氏の生死を何が分けたのか。イワノフ氏は東京から広島へ向かう列車の中でサントリーのウイスキーを1人で1本空けた。セルゲーエフ氏は酒を断っていた。

その後、ソ連は原子力施設で働く職員に少量のアルコール摂取を義務づけ、原子力潜水艦では、摂取のための一杯を「イワノフのコップ」と呼ぶようになったという。独立行政法人「放射線医学総合研究所」によると、アルコールと放射線をめぐっては、「ビール成分に防護効果を確認した」とする研究成果がある。一方で、科学的な定説にはなっていないという。

イワノフ氏の95歳の誕生日を祝った際、キリチェンコさんはサントリー・ウイスキーを贈ったという。

(核と人類取材センター・副島英樹)